書類從

二百五十七

内閣文庫
和書
三八三六八の二
七九八
二六一函一六架
冊數類號

内閣文庫
番號 和 38368
冊數 7 (2)
函號 261 9

綴じ部（喉部分）の文字等が開きが不鮮明な場所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從巻第二百五十七

和歌部百十二　家集卅

検校保己一集

源有房朝臣集

春

子日

野遊ニ子日まつ人の袖なるこゑめこ松にかくるゝ世にかはるきこゆるうた

賀茂ニ詣て合せ霞を

見わたせはかすみのうちもすゝしきを春の海と

橋邊霞

[illegible]

海邊霞

[illegible]

雨中霞

[illegible]

梅香渡水

[illegible]

山家梅

[illegible]

對山繚花

[illegible]

梅を

春はなほ[illegible]

[illegible]

月前詠合花

[illegible]

重氣詠合花

[illegible]

梅離家

[illegible]

水上落花

[illegible]

二条院の御前にて遠寄殿花と題を

[illegible]

関路帰雁

[illegible]

鶯子鳴

[illegible]

藤花

[illegible]

春暮

[illegible]

夏

郭公

[illegible]

[illegible]

雨中郭公

[illegible]

水雞と

[illegible]

葛蒲

[illegible]

早苗

[illegible]

五月雨

[illegible]

社頃鹿垣

[illegible]

故郷蛍火

[illegible]

樹陰晩涼

[illegible]

秋

旅宿七夕

[illegible]

草花未遍

[illegible]

経盛卿家合歌

あくるまつかぜゆくほどにてきりのなかにあるひとのもとにまかりたりける

皇太后宮大夫俊成

夕されはいかなる野辺のきりぎりすかれゆくくさにすだくなるらん

右馬頭資盛朝臣家合歌

雨中恋

俊成

夕まぐれ雨降ぬとてせりの秋のあくれまつ成ぬるほど

雨居恋

俊成

袖にもたまるなみだのつゆもかたしきのとこ山ぶきのよるの雨

雨

皇太后宮大夫俊成

ひとりすむあまのとまやのあまもりにあまぬ夜もなくなるあまのこえかな

経盛卿家合歌

雨中鹿

皇太后宮大夫俊成

ひとりのみ雨にぬれつつ鹿の声をあはれとこそはきくにまさりけれ

田家秋雨

藤原為忠朝臣

秋雨のふるとはなしに童たちのゆくへ尋ぬるあとのみぞなき

月前月

高松宮乃家合歌

月前月

皇太后宮大夫俊成

ながめつるかぎりはかはらぬ月なれどあきのなかばのあはれ

右所見月しるすなり

月をまとはしたるものうゑわたしたるの事あり

花の

風

嵐

煙をいはせたるのこゝろ成たくさをおもの事をたなびかせて人れ

紅葉未感

やゝ紅葉のこゝろ

落葉

山河のこゝろ

霧中落葉

霧中のこゝろ

海辺秋雪

やゝ雪あり

霧海秋暮

霧海のこゝろ

冬

時雨

しぐるゝもみぢの衣きそめ山ぢ

山居初雪

雪のこゝろ

霧中深雪

霧中深雪のこゝろ

[illegible]

行路雪

[illegible]

雪中客来

[illegible]

雪

[illegible]

晩頭千島

[illegible]

暁千島

[illegible]

[illegible]

[illegible]

湖上水鳥

[illegible]

冬月

[illegible]

社頃冬月

霜ふかき山のさとはあはれなる月のひかりにみゆる紅葉の錦

氷上見月

池水のうへはこほりてすむ月にさゝ浪たゝぬよるのしつけさ

戀

初戀

いかにしておもひそめけん人のそてはなにゝなみたのぬるゝなるらん

忍戀

しのふ恋はなみたのみこそ袖にまたつゝみかねてしら人のしる

もろともにかはらぬなからこゝろのみなほそれたかふ世をうらみん

はしきあかつきを見てかへりしかなひ

めくりあひしはかなき夢のうつゝにもまたあふことのかたきならむ

朝遇帰戀

見しよりもなほあかなくにわかれてはかへるそらなきあかつきのみち

遇不遇戀

あふことはかたしとなけくよりもあひみてのちのこゝろなりけれ

隔夜戀

たかためにひとよへたてゝまちわひぬいつの夜にかはあひみてなける

花下戀

一とせの人やかへらん花の下にこそしのふなかのえにしなりけり

春歌

[illegible]

恋遠所人

[illegible]

[illegible]

契不遇恋

[illegible]

被返書恋

[illegible]

隔物恋

[illegible]

寄獣恋

[illegible]

寄櫂恋

[illegible]

恋乃こゝろを詠侍し

思ひかねこゝろ問しのゝめにおもひしかとたゝすよ袖のなみたくられ
いはきみのうらやましきかな松か枝のときはにもよる松乃たえくやふ見えき
恋すてふ思ひそめにし身のうきはかなしさのみやなけきこゝろを
思ひいてゝことしもまたかはりつゝ身のはてなれやつきぬ思ひをしのふれ

雑

庭下つゆ見て朝陰つゆをはらひてくもまちのちぎりを
詠ひよ對松争齢といふ事を
春日山よろつ代かけて神のませる松もいくよへぬらむ
従吉祈合

ちかく乃民のかまともにきはひてよろつ代まてとあふくなるらむ
刑部卿範兼卿二位してのちつゝめて詠のうたしを
松傳栄久といふ事を
千とせまてはふるゆる松のみかきをみきの君のためにひさしかるへし
二条院の御時庭上にはつひしらぬ人をゝりつゝひえ
詠のみちはありしをしらせて妻つては
法の思ひたえぬことそしるまて和歌の浦なる名をもはなは
世すゑなおもひとりきそものかくへきひく
ためらひすとも
けふ見ゆるそのかみつかさなりしまつのちらぬこの葉

天の帝の御時にこのみかどの御さうしにさふらひける
うねめの人にやありけむ
あるそのかたちをあはれとおぼしめしてみかどめしける夜
たまやつるよ女房あまたしてそのさうしまでおくり迄
けるにこの人はまかりてあへなくやみにけり
のちにおもひわびて世をそむきて山にこもりて尼になりて
のちのこころのうちをゆかしきものにおもほしけるにこの
中よりありける
三條の右のおとゞのなかにそのありかたきをいひちらしけれ
返し

君すまぬ宿のこすゑはいかにとかしらぬにこそはなきけれ
殿上乃人にてありける人まゐりてそこそこなきけり
我すまぬさとにいはせむとあひ思ふまちたる人をまたむ
らひしものをまちをさへつゝ絶えしをまたひとり
こつまもとつらなかまし　かきくらし
かくてのちは世のなかをあはれにおもひてこころなかる
まつ山あはせてなかなか物思しけるとそ
きこゆるに女房藏人のみぞしりてこひける
人はかなかりける
我身にもあはれなるものはおもふこそ人のゆくへはしらね

たてし地くさからつゆまよ中将承世し

ころものいろよきはしくきよしく

去年の秋はきくの花もさきたるをいふて去年をとゆへき

除目のよろこひの事あらん細殿よりやさしくたまはい

らむとてつみのこるよかきはらし

なにとなく山たにさくらちれるひさしくはあらぬものをおもひきれや

高倉院うてまいりさせ給ひて諒闇なりし經嗣朝臣

おやの服きてあまたされしに閏月一日中将のうし

をもはるゝみもの(?)[illegible]にあはせてしるへにけはかゝるきよらのおもひ

同年七月七日中将泰通のゆくへ故院の御年忌

なをひいてゆやつのみし

あきの花は川のみなかきりてへ川の世のあるいはありけん

父の服ぬきしと起いまうとおもひのゆくへやはし

うらし

ちる花のなつかしさとおもきなをむつほしそかなしみのいたれ

信解品のこゝろを

子なくてなけきのはなのみはまつへしからものうきよりこそ

ろ

右府房嗣公集一冊元禄己卯冬以花山院入道右府定誠公本寫之

右源有房朝臣家集宝元年二寫一校了

平忠度朝臣集

春

立春

東海や一つ春なる小蓬莱春たちかすみ立ちそめにけり

霞

いつ見れど春の小はるの霞やる雲ぬ里は春のうつるなり

霞風帰雁を合て霞をよめる

はるかぜの雁の羽ぶきにうつるまで春の霞の立ちそめにけり

雨

春雨の降りそめにけり春の雨の降るとはなしに降りにけり

国立公文書館
National Archives of Japan

さく波や志賀の浦なみ立かへるらん

年山乃花見侍りける時よめる　人麿

中務卿親王

家ほとゝぎす待てゝ聞山さとの夜ふかくなるまてに

侍子島

住侍る我とつれなしてゝ山ほとゝぎす

簡代

なくこゑをたに聞ぬ人ぞ恋しきぬるゝ小海の春のそらより

又　三月ばかりのあしたとよみ侍りける

我ゆへはよみかるる春とおもへども言もいとはぬ人ぞあるぬ

ゆるまくなる人あらしゝ

春はくもりなくあつまてゝ明なの空

夏

郭公

心あるゝ人のなくこゑ聞てゝあはう姫子のさしけるうゝ花

郭公花橘

ゆふ暮ゆゝしきこゑ聞ゝ郭公乃花乃香

郭公

待てゝ聞てゝ聞てゝ聞ぬ郭公ゆゝしき夜毒里山賀の春の一つ宮

海辺郭公

[illegible]

萬葉

あやめ草ひきたれる人のおもかげ[illegible]

反歌

小萩ふきみだれ花ちるやさき野の風の秋ふかしも

躑躅

[illegible]

蛍

[illegible]

流下蛍火

秋ちかくなりやしぬらん清き池の面の世篠しく初る頃

[illegible]

[illegible]

秋

立秋

[illegible]

月前草花

萩うえる家の内はねる神なれば人寝風ふひてやとる月の音

落

[illegible]

荻

衣手に吹くるうせもなかりきの葉よりあたてとて易すい土ゝ色

左衛門督荻

ちはやふるかみのまもりの荻の葉乃若ゝ枝ゝ

河原院りゝ左衛門督

塩の海の苫乃あらはあまつてゝ浦芽ゝ枝ゝ

廉

ひとゝ夏ゝ廉の苫まくなりにしを風や吹らるらん

さらぬふ秋乃荻見ゝ

藤

藤人まあらぬ我ゝ人ゝ名きりまつ世ゝ乃ゝ

弱迫

小夜ゝ衣ゝ夏の世ゝ乃ゝ

月

霄のまもりやいかるいる月に更ゆくまに月あすはん

月乃光ゝ河ゝ

利ゝ世のあゝ

野任月

月新の入ゝ

関海月

月をもうけしらめひあるこの間々清水の流れの音も秋のこゑ

九月十三夜

たりとゝ雲の中に月をもてあそびもあるひとなきあ

通照寺にまゐりて月見侍りしに

あまたのうち高くて月いかにかすみの衣ぬぎ捨てしの新樹ゆしき

藤者稱衣

ぬぎすてゝ行因の墨にうつる衣一重のなかふきうつるれなる

法金剛院にまゐり侍りしに紅葉をいとゝ人ゝよりと

行りしに

生絹をいとゝ清のこゝろにまかせ人ゝ侍りし紅葉ゆ新なるこゝろ

山家の秋の夢とゝ

山里の秋のこゝろをたゝ人ゝ煙乃外ゝ蓋

冬

初冬

おきの葉ゝ霜ゝ風の音のみ朝ゝ毎ゝ冬ゝ

落葉

暮ゆきの雲ゝ風ゝ吹ゝ山ゝ嵐ゝ木ゝ葉ゝ

霰

うちつゝ雪ゝ霰ゝ袖ゝ打ゝ霰ゝ

雪

かさして風早にはまくらね志まて雪ハ之れゆく宿に積すゝりける

海邊雪

かきりなく水底はるゝ芦下折て海さひしらぬ雪そつもれる

千鳥

うち捨する磯屋乃海のさよちとり友よひうらは声さえこゆ也

月前千鳥

小夜更て月影さむき玉の浦乃とまれ小嶋にちとりなくなり

曉更千鳥

袮さめしけするまのねやさすらへかへしても賀茂嶋の浦によちとりなく也

炭竈

山ふかき雪の宿乃見えわたる炭やく煙の立のほるらん

除夜

人数よあつめぬとあつむ我なりも人並にまたすくよしも年のくるゝ

戀

神かけていひし言葉のまことならは人よりかけてかはらさらなん

身のうきよりも戀しきよりも獨ねの夜半のつらさをかこつるらん

不思戀

戀しなん後の世まてとおもひしはさても思ひのかはるなりけり

失本心戀

わりなしとおもひし事は思ひ定まりて身をまかせつゝ涙ならなく

恋遠郷人

まひらする妹のすまゐハなきひとの姿をまたかたみとはおもひける

隔河恋

逢せこそまれにもあらめ天河舟わたる星やたのもしきかな

月前恋

月影やあはれをそへて恋路には末なる人のおもかけの見ゆるまてにおもひへなる

袖のみくちなひ侍る女のさうしたてまつりしをあはひ

侍りしをとりてかへし

なけきてハかくちりみたれ袖のいかはかりよのせをかなしひけるに

恋ひそへ人を待申けるにかきおくらりていはふる

かへし

あふのまる後こそ行まよひける夜ハ雲もあハれの袖もなかりけん

なき世とハ歎きうきすさみも恋にも我やなをいさかひのうらむ

いにしへこそおもふのかりひとや恋しもやなきひとのかけハれぬ

なき出る人をうき夜半の袖すらもたとへる涙秋乃袖さそふらむ

経盛卿乃福原乃山荘にて寄松恋といふことを

かはらぬ松の心つよく契りしなかの末もかはらてかなしきはなれき

寄名所恋

あふことハいさしらなみをすまの浦の行る浪乃けふろかふさてなさけあるらし

寄源氏恋

あしてみるまさめなきにはらきぶぜんの庶ふへのもとに松の葉

義中會歌

義さえ〻ぬ庶ふ堂のあるはゆくあしてたるの命ち

年ふしてくつまるまさめ

うちみるもうひとりてるひとりてるひとりて番ちくるとふ時き

絶後梅恋

立寄すくしぬのうちうちに人ふきねとひやいきし

なるふしくひとりけるあまたてきたるの人き

うしとてはせ伝て後やとまるまたりたとる恋

いとゝあくあるめしてうあるめしてふるの月梅いかてうしてうえん

雜

国冷義驚ことつてこゝふ人をかたらく

隅乃ふふ秋の春つく後年てたりてね義月義ふ春とうの

ある所の屏風の絵るあ恋る都ち老人ふたち

所ふ人くよみ伝てるしま

あるひ〻ふるあ〻ふ春ねる人やとるる

女房ち橋ち初ちあひて言ちく歌ふなるしく

あるはたるうたるうう言る

難波はのつるきるれふ恋ふ乃ふ春ちくうる

友ちの今まちてるるゝやくふもし伝て

あくるはつかの月をみる人まへにて月をみる
しるべとて句をつくりたはむれける連歌
月はそまつれぬ春とれあくるとてこぬるとてこそ
法輪寺にてのもとたる人の中遣りて作りける
なびくらんくもゐのうへの月をみる
東の方のこひやるこゝろ春のきてふかさをしらんん
なをもて事なりとて袖をぬらん
やもとりて作りける
後人の涙をぬらす袖を又袖にぬらすき

かな
作りて
作りて世はつねの歌とつひなすつ春のかつてね袖のうへ
世をうとくなりにき事なりかゝる侍従なりて作りしかふ
山里に春のあるもとをみるこゝろ遣りて作りける
あはれ世はしひよりはいとはれ我こそ春の歌をうつ
長恨歌の心をとりて
春をまつ人はいとはれてこそ春をまつ人はいとはれ
盛方朝臣書をとりて春の歌をとりて
後鳥羽院の御時
とりて世はおもしろき事をこそ人の心は

歌一

後宴

見てもなほ袖ぬらすかな人のうたゝ寝にあくるあさぼらけ

あさぼらけ中けるかゝ寝の後

こと人もあひしらぬ恋をかくばかり

うきもつらきも袖ぬれてかな

法華経の第五の中たちまちけるかゝ

ゆるしみけるかな

かゝるもゝもゝもゝ中ゝ中ゝ

法華経第五乃ゝ中ゝ中ゝ信解品

提婆品

安楽行品

観音品

八幡隠岐奈

神ひて行会ゝ中ゝ中ゝ

賀茂社会ゝ述懐乃ゝ

習さはするに我るふあらし次に又ひの秋か出よかへるき世をもしるよし

述懐

なかくへは何事もましと思ふ世を歎き身のうくはうらみてもなかるら

祝

よろつ代を見る先へいく秋なる君かみあかなきこゝろそはかむのしるそ花

三位中将重衡のもとより内の御大事ん事へ梅を

つゝみてまいらせとてこされて侍りしに

みな世経へき君かあそしに世の春は身をむすふゆ岩の梅かえ

右一本者薩摩守忠度朝臣俊成卿のもとへおくりし

侍りし自筆乃本とて大樹より出されし兵部卿宗継

宗にかさそてまいらする本をうつし侍りる独かに写す

彼卿乃筆蹟に于て後世乃證本にもなるへく

ふかくかきし筆にまかせて字畫をもよく合侍り

ぬるをなん

文明十六年春三月中の三日

羽林藤原基春

右忠度朝臣集以古寫二本比校了

惟宗廣言集 自永暦至寿永

春

元日の朝の海を

行路の日

子日もとめてする春の野に出でたちをりぬる

霞の十首うち作り中に

君ぞ世にあるこの春ぞうるはしき嬉しきめぐりむ

行くとのみわがゆくゆくとやゆくとて主ぞ知らぬ

名所霞 石林苑

春かすみたなひきぬる遠近の嶺もまかひてむすふ雲のまゝの山

霞隔関路人

あふ坂の世にゆく人の往来もかすみのうちに数のまされる

海邊霞

わしほなく煙もたゆるあまのやかすみにも春をしらぬやまん

鶯

春来ぬとまつ花の梅を見てねられぬしつけるかな鶯のなく

暁鶯

我やとのまつ花の梅にさそはれて夜をこめてなく鶯のこゑ　作ノ欠

山家鶯

宿ちかき花の木の梅に雪きえて谷のおちかた鶯のこゑ

百首中残雪

おくやまのこたちかさなれる木のまより春さへ雪そ降しきるらん　の歌

山家残雪

人もいさはれぬ宿のまつもとに春のいそかぬ峯の雪のきえかたの道

雲林苑の歌合によみし

春来ぬれはおもふこゝろまかれぬそ枝にはなほこそひらけかなと

宰相入道教長歌合山家をとふといへる心を

花のちるたにの梢をもれて出る雲のかゝる山の桜なりけり

同しく讀るを

散らて後さそはれよとや山さくらたつねる峯にかゝる白雲

侍従家隆家哥合花哉

よしの山すみそめしより跡たえてかへりぬる花のちるまて

日吉社哥合花を

湖あらし比良の高ねの春すゑはよするさゝ浪花のしら雪

公卿殿上人あまた鞠会あり白河にて鞠会あり

てあそひ侍りてまかりいてしのちかくしけるにいへるや

さるほとに侍しに合日和哥の紀なと遺恨なるよし

人〻侍しかは女房のかたしもさしそへしをのはなよりも

て侍しを人〻ちらすのみよりもあかすなりぬるを色

かゝるはなみにおきつゝさくらちるおくぬる紀の浦なみ

ことも侍ふ哉

花ゆへにあすさへきつゝ思ひけりちるをはしらやいはれる春の川の瀬

刑部卿頼輔朝臣家哥合帰鴈哉

難波かたよそにねてかへる雁ねはなきすゝめならめあはれかまくら

欽定讃岐院御會

いさなれは春はゆきても思ふまにかはらてかへれ山櫻の花

夏十五首

更衣

夏ころもけふたちかふる花をなとかれむおしみてかへるおもひ

禁中更衣

[illegible]

名所卯花

[illegible]

日吉社の合歓花を

[illegible]

侍従家隆の合歓花

[illegible]

暮天郭公

[illegible]

馬上郭公

[illegible]

海道郭公

[illegible]

哥枝花の合歓花を

[illegible]

連日五月雨

[illegible]

[illegible]

連庭照射　百首

[illegible]

早苗交道　元合

秋[illegible]

鳴虫　螢

[illegible]

水風似秋　佳花

[illegible]

秋二十首

閑庭秋来　元合

[illegible]

雨中七夕　元合

[illegible]

夕草花　元合

[illegible]

野径女郎花

[illegible]

夕萩

[illegible]

承安二年五月十日ごろ内裏の山花を
侍臣たちに仕へよと女房のつかはせたりける
仕へふ梅をこのおりは咲きいそぐらん
散てく花のこのはるかなくはかなき
いかに思ひ
手ごとにかなひうゑよとうぐひすの里に梅の名を
月ごとに十五夜ごとみ仕へ申て
玉ぬきのいとうつ秋の月ゆゑ
野径月
九月ごとにかりのこゑ雲ゐ遠くなりぬる月ゆゑ

日吉歌合月
月清み三笠の山をあらし吹く
海上月
春ふかみ霞の海に月ぞ入る
雲間明月 六合
雲ゐ月いとゆ曇りなき庭の雪
九月十三夜 住花
月ぞ秋のなかばとなりぬ
百首中 席
なびきやすらんまつ虫の

[illegible] 元合

山家曉鹿 山元合

[illegible] 出 元合

庭菊似雪 元合

[illegible]

紅白見紅葉 白行合

[illegible]

福原京よりこうつり里侍りしころ故郷荒廃よりふるとて人々よみ侍りしうち

ひとりぬる時乃ゝ成ぬるひとりぬる時乃ゝ成ぬるとよみ侍りしを

冬千五首

田家初冬

いなかびとのおほ田ふせるをのもとにかりそめのこてをとしぬるうら

海邊落葉

波ちかくのみちなきまでかの田原まつくいかの深山さすらん

羇中落葉 賀茂

[illegible]

野径時雨　賀茂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行路雪深　賀茂

[illegible]

雪中客来　賀茂

[illegible]

湖上水鳥　賀茂

[illegible]

月前水鳥　元合

[illegible]

月前雪　白川

[illegible]

[illegible]

蘆洲千鳥

[illegible]

煙火表友

うきをしらぬかすみのうへにまつこゝろはやまのよるのけむり

雪述懷除歌

数ちりぬ身をうかべはなをたにたのもしきかな

戀廿首

初恋　百首

なびかぬをいかにせんとはうらみしをうらやましきは恋ゆへ

恋　新撰名所百合

よるのかたにむすびてしたはうつしけるかきねのまくらぬれぬ

日吉百合恋の心を

ちはやぶる神もまもらぬ恋ゆへにいかなる罪のあるかとはまし

河内守隆親の百合恋乃心

あはれとはいとはるかなるなかめをもあはれとはいはるるかな

あはれてはちはやぶる恋といはるるは

恋ちるはなをおしてはるかぜのあはれとはいはるるかな

被坊人恋　百合

ひとをこそうらめとはいはるるかな

恋三人

ものの恋はたゝ河内守のみにあらずして貞とのあまたはるかなり

馬上恋　佐花

おもひの程弱によせていにしへはこひちぬるまはあふ人もなし

月前恋　三の舎

月のすむなかれてゆくまにいつまては涙の色のうつる袖かな

老後恋

おもひきやおいそめて身は身になりてあふをねかふの程はかなしとは

憑命他人恋

あふまての契はよかれなにまとひて待つやたまのをあまの松かね

三の林苑よもくるしその日影のうつる恋といふらん

あつまちのすゑの末のひとたれはおもふもなすゑやつれとはん

後朝恋　契秀

かへるさは袖に宮河ろは浦まての袂あふよはかなき物みてしかな

同こころを

あくるまてそふるみおもせて朝寝て葉の上の露と涙のこほるる

来不恋　三の舎

うらみても我かねひとりたのめおきて恋にまてのあるかとおもひし

寝人恋人　三の林苑

きぬくしてまつむなしき袖にひとりてあかぬ涙と露ぞおきつる

二世ちきる恋

ちきりしその後の世まてと契りけるも我はたのまぬかへるのみ袂

遇不逢恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雜十首

祝

[illegible]

王照君

[illegible]

上陽人

[illegible]

旅

[illegible]

述懷 二句合

[illegible]

[illegible]

世事[illegible]

合[illegible]

世事[illegible]

無常

[illegible]

即身成佛

[illegible]

和光同塵

[illegible]

廣言家集以阿佛真蹟不遠一字書写再

校畢

貞享二年初冬中澣　前内大臣紘光

右惟宗廣言家集以善類本移校畢矣

鴨長明集

春

歳内立春

[illegible]

霞隔浦

[illegible]

梅花雜歌

[illegible]

花咲おりしかりしより梅の[illegible]

おもひ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月前紅葉

[illegible]

螢火照橋

[illegible]

故郷火来[illegible]

[illegible]

交月映泉

[illegible]

樹陰銀泉

[illegible]

樹陰晩涼

[illegible]

秋

[illegible]

水鳥来鳴

[illegible]

[illegible]

家の中にかくれてきこえぬこゑを
ほのかなるこゑ
あるかなきかの人あるかなきかの
閑庭菊蓋
[illegible]
[illegible]
雁声遠聞
[illegible]
[illegible]

風[illegible]
[illegible]
霧隔行舟
[illegible]
月
[illegible]
[illegible]
[illegible]
荒屋見月

海上月

[illegible]

下総國まつの浦にて

[illegible]

出雲守惜

[illegible]

月落て海のまつかぜ[illegible]

搗衣音遠

[illegible]

海辺搗衣

紅葉映池水

秋[illegible]

女郎花露[illegible]

[illegible]

長月の晦日の藤のもとにて

[illegible]

出雲惜秋

秋[illegible]

冬

時雨

[illegible]

[illegible]

落葉

[illegible]

大井河を[illegible]て落葉[illegible]

あすもこむとを[illegible]

殘菊

[illegible]

霰

[illegible]

あら[illegible]

源頼朝卿

[illegible]

[illegible]

氷連歌

[illegible]

[illegible]

曉千鳥

[illegible]

月前水鳥

社頃の月

ある人の小野にまかりて侍りけるに

寒蛍隔水

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後朝恋

越路の雪を[illegible]

成疑心恋

[illegible]

毎夜他行恋

[illegible]

思二世恋

[illegible]

並底不逢恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

對泉無人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清乃國のこなたにあり　ちかき雖ハ　いとたるあるあれ　住ぬる
山里ちかきあまあり　ちかくあるふ　ゆうとよ　ゆる
山里ふきてみるこふたあるひさしなる　なまつれ　くと　ゆ　蓄ぬん
をしなべひ　ゆるこつなるるきさをみて　遠　慮乃
ちろ　ぬ

なくこ　ゆ　乃　ま　こ　ぬ　の　う　く　ゆ　る　ま　こ　ゆ　た　こ　ゆ　ま　る　こ　ふ　い
あ　ま　ふ　く　こ　ふ　む　き　こ　こ　ふ　ぬ　な　る　ぬ　ま　く　こ　ま　ま　ま　ゆ　く　き
ぬ　ま　も　あ　く　な　ふ　ま　ま　る　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ゆ　の　ま　ぬ　ま　く　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
う　ぬ　な　く　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

雲ゐ月ハ　花　ぬ
世ハ　ぬ
ぬ　ぬ
ぬ　ぬ
ぬ　ぬ

ぬ　ぬ
ぬ　ぬ
ぬ　ぬ
ぬ　ぬ
ぬ　ぬ

ぬ　ぬ
ぬ　ぬ
ぬ　ぬ
ぬ　ぬ
ぬ　ぬ

[illegible]

[illegible]

浄土[illegible]相[illegible]地[illegible]中[illegible]

[illegible]

[illegible]

群書類從卷第二百五十七

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan